

栄養に関連する看護計画

看護ニーズ

- 成長・発達に必要な栄養素と必要カロリーおよび食事が摂取できる

ニーズが充足されない理由

- 咀嚼嚥下機能の未熟さや過緊張による嚥下困難がある

看護目標

- よい姿勢を保持して上手に咀嚼・嚥下し、楽に食事をする事ができている

O - P

- 1 筋緊張の状態(毎食前)
- 2 口腔および口腔周囲の過敏状態の確認
- 3 嚥下の状態(VF 検査)
- 4 食事形態の確認
- 5 食事時の良肢位の確認
- 6 体重と必要摂取カロリーの計算
- 7 水分量と排尿・不感蒸泄(発汗, 流涎)のバランス(in-out チェック)
- 8 排便状態
- 9 食欲と嗜好品の確認
- 10 アレルギーの有無
- 11 内服薬
- 12 血液データ, カウプ指数

C - P

- 1 頭部にアイスパックをセットしたクッションチェアにしっかりと坐位姿勢をとる
- 2 誤嚥しない角度に調整する
- 3 頸部周囲にタオルなどで食べこぼし用のエプロンをあてる
- 4 食事前に口腔周囲の筋群をマッサージする(毎食前3回/日)
- 5 シリコンスプーンで食事介助を行う
- 6 吞気が多い場合は、背中を軽く叩いて排気させる
- 7 食事中は下顎保持を行い、上下の口唇をしっかり閉じて咀嚼できるようにする
- 8 経口摂取が進まなかった場合、補食としてトロミをつけた経腸栄養剤を摂取する
- 9 発作や体調不良で毎食の食事が1/3を下回る場合は、経管栄養チューブを挿入して経腸栄養剤を注入する

E - P

- 1 セラピストから食事時の良肢位保持や介助についてのアドバイスを受ける

ケアプランのポイント(理由・根拠)

▶ O-5

筋緊張が強い乳幼児の場合、安全な咀嚼と嚥下のためには良肢位保持が最も大事なポイントとなる。腸骨をしっかりとクッションチェアやバギーのベルトで保持し、頸部が後屈しないようにタオルやクッションで姿勢を整える。

また、四肢の緊張が強いときは、四肢を固定したほうが落ち着く場合もあるが、子どもにとってはより苦痛を感じることもあるため、セラピストに姿勢評価を依頼する。

▶ O-11

抗てんかん薬によっては副作用として、食欲の低下がみられる。そのため、抗てんかん薬の量や種類に変更があった場合には、食欲と摂取した食事を必ず確認する。

▶ C-2

VF 検査の結果をもとに GER(胃食道逆流)の評価を行い、誤嚥しにくい角度調整を行う。介助する人が変わっても同じ角度になるよう、クッションチェアやバギーに角度の目印をつけておくとよい。

▶ C-6

アテトーゼ型の乳幼児は、咀嚼や嚥下の際に吞気することがあり、嘔気や嘔吐の原因になる。吞気があるときはいったん食事を中止して排気させる。

▶ C-8

乳幼児は体内水分量が多いため、容易に脱水傾向になりやすい。特に筋緊張が強いときは、発汗によって体内の電解質バランスが崩れるため、こまめな水分補給(経口摂取が難しいときは、経管栄養チューブからの注入)に留意する。

▶ E-1

この時期は「食事に関心をもつ」「楽しい食事をする」ことを目標にする。子どもにいやがる素振りがあれば、決して無理強いしない。